

『刑事コロンボ』と競争社会アメリカ

高田 修平*

TV Drama Series *Columbo* as Considered through the Competitive Society of America

by Shuhei TAKADA

(Received October 31, 2011)

ABSTRACT

American TV drama series *Columbo* was produced by NBC and broadcasted worldwide in 1970s. It generally had a good reputation among both domestic and foreign viewers. But was it similarly interpreted here in Japan as in the United States? Such a feeling of doubt occurred to me when I bought the recently published DVD edition of *Columbo* and watched it again after three decades interval without dubbing or Japanese subtitles. Columbo's 'English' talk with the murderers seemed to me surprisingly more straightforward than the one dubbed in by a Japanese actor. I don't deny that Columbo's behavior is really bizarre in many cases. His pretended forgetfulness and frequent references to his wife and many real or fictional relatives are useful tools for his pursuit of the wealthy and/or prestigious murderers. But our exclusive concern about his way of investigation, as clearly seen among many Japanese fans of *Columbo*, makes us blind to its other theme: a relationship show between Columbo and the murderers.

Columbo's thematic duality is suggested by its "inverted mystery form," a method of storytelling which makes viewers witness the murder scene at the outset. We are introduced to the murderers' motive for their crimes and follow the plot of investigation from the alternate viewpoints of Columbo and the murderers. The confrontation between Columbo and the murderers is not harsh. While Columbo despises some of the forty-five murderers in total, he feels sorry for those who are pushed into such cruel acts under highly competitive and stressful circumstances. We thus watch from both sides an extended and sometimes intimate relationship between the lieutenant and the murderers which cannot be summed up merely as an investigation of crimes. I would like to make clear in this paper that this unique feature of *Columbo* derives from its location in the competitive society of America.

1-1. 1970年代のテレビドラマ『刑事コロンボ』
の脚本を書いたリチャード・レヴィンソンとウィ

リアム・リンクの共著 *Stay Tuned* (1981) によ
れば、このテレビドラマが制作された 1970 年
代のアメリカテレビ業界は、けっして傑作が

* 総合経営学部マネジメント学科教授

生まれるような状況ではなかった¹⁾。テレビドラマの制作はプロデューサーを中心に行われるが、彼は制作会社、ネットワーク、出演俳優、視聴率を左右する聴衆など、さまざまな人々の対応に日々追われ、番組がスムーズに制作されるように調整するのがせいっぱいで、とても番組の質に氣にする余裕はない²⁾。

このような状況の中で『刑事コロンボ』が好評を博したのは、質の高いテレビドラマをめざして妥協のない脚本を書き続けてきたレヴィンソンとリンクの功績による。『刑事コロンボ』に関して本格的な解説書を著わしたテレビコラムニストのマーク・デウィッドジアックは、その著書 *The Columbo File: A Casebook* (1988) の中で二人の功績を次のように説明している³⁾。

At a time when the networks wanted the safe entertainment of *Gomer Pyle*, *Lucy Show* and *The Beverly Hillbillies*, Levinson and Link decided that television could and should have a special conscience. They became known for breaking new ground for the medium. (17)

レヴィンソンとリンクが書いたテレビドラマの脚本は、学生騒動を扱った *The World Is Watching* (1969)、同性愛を扱った *The Certain Summer* (1972)、逃亡した兵士の死刑を扱った *The Execution of Private Slovik* (1974)、銃所持を扱った *The Gun* (1974)、テレビの暴力を扱った *The Storyteller* (1977) など、一貫して当時の社会的問題を正面から扱う倫理性の高さが認められる。『刑事コロンボ』においても、当時の他の刑事ドラマが二枚目俳優の派手なアクションを売り物としていたのに対して、風采のあがらない刑事と犯人の対話に焦点を絞り、捜査を通して犯人の内面を掘り下げる手法に、ベトナム戦争やウォーターゲート事件で社会的な関心の高まった聴衆の好評を博したと思われる。

1-2. 『刑事コロンボ』誕生の経緯

レヴィンソンとリンクはテレビドラマの脚本を

書く前、*Hitchcock's Mystery Magazine* や *Playboy* などの雑誌に短編小説を投稿して生活費を稼いでいたが、その短編のひとつ *May I Come In* に『刑事コロンボ』の原型が見られる。それは脚色されて NBC の *The Chevy Mystery Show* の放送一回分のドラマ *Enough Rope* (60 分) となり、次にサンフランシスコで上演された心理学者の偽装した妻殺しを扱った演劇 *Prescription: Murder* の台本に書きなおされる。さらにユニバーサル・スタジオがテレビ映画の脚本を捜していると聞いて、二人は *Prescription: Murder* を同じタイトルのままテレビドラマに書きなおして提出する。劇場でコロンボを演じたベテラン俳優トマス・ミッチェルの死でピーター・フォークが急遽代役に抜擢され、制作されたテレビドラマが今日 45 本の『刑事コロンボ』シリーズとして知られる作品群の第 1 作目となる。

Prescription: Murder (1967) は好評を博し、コロンボという風変わりな刑事が出演する特異な形式の刑事ドラマが、視聴者に抵抗なく受け入れられたことを証明する。しかし、これはあくまでパイロット版で、『刑事コロンボ』のドラマシリーズ化を NBC から約束されたわけではない。

Prescription: Murder の成功で気を良くした NBC は、再度刑事コロンボのパイロット版の脚本をレヴィンソンとリンクに依頼する。その時二人は『刑事マクロード』など他のテレビドラマの脚本も抱えて手一杯だったので、野心的な女弁護士の手殺しを扱った新しいドラマ *Ransom for a Dead Man* の構想だけを提供し、脚本の細部は他の作家へ任せてしまう。その後、*Ransom for a Dead Man* (1971) の成功で『刑事コロンボ』のドラマシリーズ化が決定し、第 1 シーズン 7 作のプロデュースを担当したレヴィンソンとリンクは、NBC から第 2 シーズンのプロデュースも要請されるが、二人はそれを断って『刑事コロンボ』の制作から完全に降りてしまう。

脚本家が非常に不安定な職業で、過去の実績で

一部の売れっ子作家だけを囲い込むテレビ局の姿勢に対抗するため、他の脚本家は多くの仕事を細切れに引き受けざるを得なかった状況が、*Stay Tuned*のなかで以下のように説明されている。

The "track record" syndrome results in many shows vying for the talents of very few writers. As soon as the new network schedule is announced there is an instant mating dance as television producers hurriedly attempt to "lock up" one of the favored writers. But the writer doesn't dare take only one assignment at a time. If he did---if he worked on his teleplay for a month or so---he would discover when he turned it in that all of his markets are closed. Knowing this, and recognizing that he cannot earn his yearly nut with just one script, the free-lance writer often takes as many assignments as he can get. (75)

ドラマ作りの中心となるプロデューサーだけでなく、脚本家や俳優も掛けもちで複数の仕事をその場しのぎにこなしているテレビの制作現場から、『刑事コロンボ』のような質の高いドラマがどのようにして生まれたのか。

その理由は二つ考えられる。第一に、ドラマ制作に関わった複数のプロデューサー、脚本家、俳優など、さまざまな人々が最初の2作で確立した従来の刑事ドラマとはかけ離れた『刑事コロンボ』の特徴をよく理解して協力したこと。特に、ドラマのスタッフが相次いで入れ替わる中で、主役としてドラマ制作に深く関与し続けたコロンボ役ピーター・フォークの存在が大きい。第二に、『刑事コロンボ』がシリーズ化される際に *McCloud* や *McMillan and Wife* など、他の3本のドラマと組んで *The NBC Mystery Movie* を構成し、4本のドラマが毎週交代で放映されたこと。4週間に一度の制作ペースによって、シリーズ化

された『刑事コロンボ』は比較的十分な制作時間を与えられた。

1-3. ピーター・フォークの功績

劇場で *Prescription: Murder* のコロンボ役を演じたトマス・ミッチェルという 70 歳に近いアカデミー賞俳優が急死して、ニューヨークのギャング映画やテレビドラマに弁護士役で出演した経験のあるピーター・フォークが、プロデューサーのアーヴィングによれば「まあまあの」(原文は"passable") 代役として、テレビドラマのコロンボ役に選ばれる。しかし実際に役作りを始めると、ピーター・フォークのだらしない身だしなみや義眼による奇妙な目つきは、レヴィンソンとリンクの描くコロンボの役柄にぴったりと当てはまる。ピーター・フォーク自身、俳優としての半生を振り返った自伝 *Just One More Thing* (2006) の中で、コロンボ刑事役がまさに自分のほまり役であることを次のように述懐している⁴⁾。

In life I dress like a slob, so I knew I was going to enjoy the ordinary side of Columbo since being ordinary comes easy for me. On the other hand, I'm also odd like the lieutenant. My mind is off someplace. (135)

コロンボの二面性をピーター・フォークは性来備えていたらしい。ちなみに、レヴィンソンとリンクは *Stay Tuned* の中で、ピーター・フォークは頭のいい俳優で、脚本を書いた自分たちと同じくらいコロンボのことを「知り尽くしていた」(原文は"familiar with") と記している⁵⁾。

脚本家と主演俳優が作品の理解を共有することで、ドラマの制作がスムーズに進行したと思われるかもしれないが、ピーター・フォークは作品の質に関して妥協を許さない俳優なので、脚本で納得できない箇所があると、制作スタッフに徹底的に食い下がった。彼の干渉はコロンボの役作り

にとどまらずドラマ全体に及び、第1シーズン7作目の野心的な建築家の殺人を扱った *Blueprint for Murder* (1972) は、唯一彼の監督兼主演で制作されている。

ピーター・フォークの非妥協的態度はドラマの制作を中断させ、制作スタッフに苦痛を強いることも頻繁にあったが、制作日数や予算の制限を押しつけてくるスタジオに対しても、彼は作品の質を守るために頑強に抵抗したので、それが制作スタッフのドラマ作りを後押しすることになった。彼の抵抗がついにストライキに発展したのは、第1シーズン5作目、自分の生活に干渉する広告代理店社長で富豪の兄を殺害する女性を扱った *Lady in Waiting* (1971) の制作中である。この事件は"Lady in Waiting War"と呼ばれ、最終的に『刑事コロンボ』の人気を考慮してスタジオ側が折れ、ピーター・フォークはより高額な報酬と制作予算、制作日数の延長を勝ち取っている。

ピーター・フォークは主役のコロンボを演じながら、制作スタッフの目線でドラマ作りを考えていた。それはプロデューサーや脚本家が相次いで入れ替わるという『刑事コロンボ』制作の状況下で、10年間続いたテレビドラマシリーズに一貫性を与えるために大きく貢献している。レヴィンソンとリンクは、彼の功績を次のように説明する。

In our absence he gradually took over full control. Producers came and went--six more followed us over the years--but Falk was the constant, and in many ways this was beneficial. He thought for better scripts, publicized the series, and enriched and deepened his performance. (106)

『刑事コロンボ』の最初の脚本を書いた二人が第1シーズンの終了時に去り、ピーター・フォークは第2シーズン以降のドラマ制作のまさに核となって、脚本に目を配りながらコロンボの役作り

を深化させる。

その後も新たな脚本家やプロデューサーを迎えて最初のドラマ作りに多少修正を加えながら、『刑事コロンボ』は7シーズン継続される。ピーター・フォークはコロンボ役で3度エミー賞を受賞し、ドラマシリーズは放送開始から数年間常にトップテン番組の位置をキープし、何度も人気ナンバーワンの座に輝いた。その間に助演男優 (*By Dawn's Early Light* で陸軍幼年学校校長を演じたパトリック・マクグーハン) や脚本部門のエミー賞も受賞し、『刑事コロンボ』は高い人気を維持しながら10年後に番組が打ち切られ、*The NBC Mystery Movie* でいっしょに組んだ他のドラマはそれまでにすべて姿を消していた。

2. 『刑事コロンボ』の特異性

テレビの刑事ドラマ作りの常識に従えば、『刑事コロンボ』はヒットできそうもない要素に満ちている。アクションが少なく、ドラマは主に刑事と犯人の延々と続く対話で構成される。プロットは入り組んでわかりづらい。ドラマが始まって主役はなかなか現れず、やっと20分後に登場した主役は小柄で身なりもだらしなく、すぐ息切れする拳銃も打てないベテラン刑事。以上は、デウィドジックが *The Columbo Phile* の前書きで指摘した『刑事コロンボ』の特徴である⁶⁾。

しかしこれらの特徴は、むしろこのテレビドラマの斬新性を示している。まず非暴力性であるが、『刑事コロンボ』をハメットやチャンドラーなどアメリカ推理小説の伝統から離して、アガサ・クリスティ風の物静かな"English drawing room murder mystery"に近付けた。プロットは刑事のアクションに頼らず、刑事と犯人の対話を中心に展開される。次に主役がなかなか登場しないドラマ展開であるが、冒頭20分は犯人の殺害シーンに充てられ、通報を受けるまでコロンボは登場しない。これはレヴィンソンとリンクが取り入れた"inverted' mystery form"と呼ばれるミステリー

形式で、犯人を最初に視聴者に明かしてしまう以上、興味の対象は「刑事がいかにしてこの犯人を捕まえるか」の一点に絞られる。その要素だけで視聴者を1時間40分テレビの前で釘づけにするには、ピーター・フォークが指摘するように、「すばらしい意外性があるが、あざやか、しかももっともらしさもある」（原文は"delightfully unexpected, brilliant, and believable"）脚本を練らなければならない。

物静かで緻密な脚本を通して描かれるのは、コロンボ刑事と犯人の対決であるが、レヴィンソンとリンクはユニークな対決の組み合わせを使っている。たくましく男前のアメリカの伝統的刑事ドラマの主演とは程遠い容貌のコロンボに対して、犯人は弁護士、会社経営者、音楽家、美術批評家、有名俳優、テレビプロデューサーなど、アメリカの競争社会を勝ち抜いた人物である。みすばらしいコロンボが金持ちの犯人を捕まえる点に政治的メッセージを感じ取った批評家もいるが、そのねらいはあくまでドラマ性の追求であると、レヴィンソンとリンクは *Stay Tuned* の中に記している⁸⁾。コロンボが競争社会の勝者、すなわち富裕層に敵意を示していないことは、この論文の最終章で解説する。

現実的にみれば、コロンボのようなみすばらしい刑事が才気煥発なアメリカ社会の勝者を捕まえることはありえない。しかしそれが達成される点に、コロンボの意外な二面性というこのテレビドラマの劇的フィクショナルリティがある。彼はぼろぼろのコートを着てポンコツの車を運転するさえない刑事であるが、人並みはずれて犯罪を嗅ぎわける嗅覚を持っている。レヴィンソンとリンクが指摘するように、この設定の中にも現実の刑事にはあり得ないいくつかのフィクショナルリティが隠されている。

We knew that no police officer on earth would be permitted to dress as shabby as Columbo, or

drive a car as desperately in need of burial, but in the interest of flavorful characterization we deliberately chose not to be realistic. Our show would be a fantasy, and as such it would avoid the harsher aspects of a true policeman's life.(94-5)

コロンボのみすばらしさを強調するための衣装や小道具は、実際の警察官とはかけ離れている。しかしレヴィンソンとリンクがこの刑事ドラマで究極的に描いているのは"fantasy"であり、"the harsher aspects of a true policeman's life"ではない。

ファンタジーとは夢の世界を描くことであるが、ディズニー映画のファンタジーが子どもの夢を描いているすれば、『刑事コロンボ』のファンタジーはアメリカ中産階級のたくましさを美化するために使われている。彼が金持ちの犯罪を捜査する時、ちょうどよいタイミングで彼の妻やおびただしい数の親戚が解決のヒントを与えてくれる。それが作り話かどうかは問題ではない。彼の家庭環境をファンタジーのベールに包むことによって、中産階級のさえない刑事に魔法の能力が付与され、このドラマの意外性が生まれる。レヴィンソンとリンクは、その劇的効果を次のように解説する。

We even decided never to show him at police headquarters or at home; it seemed to us much more effective if he drifted into our stories from limbo. (95)

刑事コロンボの不思議な能力は、コロンボの家族という「忘却の世界」から生まれる。それは撮影するカメラが入ることはできない禁断の領域である。

3. アメリカの競争社会が生んだ刑事ドラマ

アメリカで制作された多くの刑事ドラマには、多人種多民族、自動車社会、個人主義的競争原理、市場経済中心のビジネス大国、巨大なメディア産業、大都市、大衆消費社会、銃と麻薬の犯罪、離婚や訴訟の多発など、アメリカ社会の様々な特徴が描かれている。しかし『刑事コロンボ』ほど、犯人と刑事の奇妙な組み合わせによってアメリカ社会の競争原理を端的に強調するドラマは他にない。つまり殺人事件の犯人がいずれも競争社会の勝者で、脚光を浴びながら豪邸に暮らす人々で、ロス市警から派遣される犯罪捜査の刑事は、故障しかけた車からホームレスに間違われる服装で降りてくる、いかにもエスニック風の小柄な男なのだ。ちなみに、コロンボ刑事はイタリア系の設定だが、演じているピーター・フォークは実際はロシア系の出身である。

このドラマを初めて見た多くの批評家がその奇妙な設定に政治的メッセージを感じ取ったと、レヴィンソンとリンクは記している。

Many critics found it an ever-so-slightly subversive attack on the American class system in which a proletarian hero triumphed over the effete and monied members of the Establishment. But the reason for this was dramatic rather than political. Given the persona of Falk as an actor, it would have been foolish to play him against a similar type. (95)

このドラマの犯人と刑事の対決には、競争社会の階段を駆け上がった階層と途中で踏みとどまった階層（庶民）とのコントラストが示され、後者が前者を負かす意外性がドラマのひとつの魅力である。レヴィンソンとリンクが指摘するように、これは劇的な効果をねらった設定であり、アメリカの競争社会にたいする批判ではない。しかし犯人がいずれも競争社会の勝者であることを考えれば、このドラマは彼らが陥りやすい罠、すなわ

ちアメリカ競争社会のひずみを問題としているのは確かであり、その点にレヴィンソンとリンクの倫理的意識がこめられている。

アメリカ競争社会のひずみとは何か。アメリカ社会の特徴をいくつかの項目に分けて説明している『異文化社会アメリカ』という本の中から、『刑事コロンボ』のテーマに関わるアメリカ社会の問題点を引用してみたい。アメリカの競争主義に関して、著者は過度の競争から生まれる社会の病理を次のように述べる⁹⁾。

競争は、確かに個々人の能力を最大限に発揮する機会を提供し、アメリカ社会に活力を与えるが、その半面、個々人は不断に競争の圧力のもとにあり、ストレスと緊張を強いられる。結果、人々は他人との協調・協力よりも、個々にバラバラな状態で生きることになる。アルコール中毒、暴力犯罪、性犯罪、家庭内暴力なども、アメリカが人間と人間との協調・協力よりも、人間と人間との競争を優先する結果なのである。(149)

『刑事コロンボ』で扱われる夫婦、兄弟、仕事仲間同士の不和は、裕福な階層の人々が直面する「不断の競争圧力」や「ストレスと緊張」によって、普通ならば協調や協力で解決すべき金銭トラブルや不倫に関わる問題が「暴力犯罪」に発展してしまう。さらに『異文化社会アメリカ』の著者が指摘するように、過度の競争意識は過度の個人主義へとつながり、このドラマの犯罪者も「やみくもに個人の権利や利害ばかりを追求し、自己の行動への責任を回避する自己中心的傾向」(96)を強めることになる。。

個人の競争原理に基づいたアメリカは、「機会の平等」によってよりよい生活を競争で追求することが奨励される社会である。貧しい家庭に生まれたアメリカ人は、当然のようにより豊かな生活をめざして努力する。このドラマの犯人と刑事の関係は、実はアメリカ社会の競争原理に忠実に従

った人間とそれに背を向けた人間の関係でもあるが、コロンボと犯人の生き方の対比を通して、競争原理の中にひそむ危険性を暗示する場面がある。次に引用するのは第7シーズン3作目 *Make Me a Perfect Murder* (1978)の一場で、貧しい生い立ちからテレビ局の女性プロデューサーへと登りつめたケイ・フリーストーンが、少女時代に住んだ家でコロンボと遭遇する。

Kay: You know I always knew this place was small, but I never realized it was quite this tiny. The four of us cramped in here, never a chance to be alone.

Columbo: I took a trip a few years ago. Took Mrs. Columbo back to the house where I grew up. It looked all shrunken. I had five brothers and one sister, Miss Freestone, and all that was really terrific. There was always someone around for company. We were never lonely.

Kay: You're a very special man, Lieutenant. You accept things as they are. I try to change them.

Columbo: That's to your credit, ma'am. Your success and ambition and all.

「兄弟が多い小さな家」はケイとコロンボが共有する過去の体験であるが、それに対する姿勢の対比が二人のその後の人生を決定づけている。貧しい子供時代が「兄弟がひしめいて、ひとりになることもできない」ネガティブな記憶につながり、そこから飛び出すために努力したケイにとって、「いつも誰かそばにいて、ひとりにならずに済んだ」思い出をなつかしむコロンボが「変わり者」に思える。アメリカの競争社会を基準とすれば、過去を変えようとするケイの生き方が、標準に近いのかもしれない。しかしケイが出世の代償に個人主義の孤独に陥り、それが彼女の犯罪の引き金となったのに対して、コロンボは「貧しさの現状

を受け入れる」ことによって、妻や多くの親戚との人間的つながりを今も維持している。

4. 『刑事コロンボ』の魅力

この刑事ドラマの殺人の動機は飢えや貧困ではなく、激しい競争の中で先鋭化した個人主義の確執である。ギャングも麻薬の売人も失業中の黒人も現われず、殺人事件はシャンデリアの下がった豪邸の客間や寝室、または仕事中のオフィスやテレビ局の中など、誰も犯罪を予期しない場所で発生する。犯人は金銭トラブルや浮気の清算などの自己中心的な動機で殺人を犯す場合もあるが、個人主義の確執の結果、それまで築いてきた自分の生活を踏みにじられ、やむなく犯行に及ぶことも多い。コロンボが冷酷な犯人に怒りを浴びせるような凶悪事件は、*The Columbo Phile*によれば45件中3件にすぎない¹⁰。彼が担当するより多くの事件において、コロンボは自分の生きがいを守るためやむなく犯行に及んだ犯人のジレンマと向かい合う。そのような場合、コロンボはドラマの最後で逮捕される犯人をなぜか寂しげな表情で見つめている。それは自分と同じ貧しい境遇に生まれながら、上の階層をめざしたばかりに個人主義のわなにはまって殺人を犯したケイ・フリーストーンを見つめるのと同じ、やさしい同情のまなざしである。

脚本を書いたレヴィンソンとリンクは、この刑事ドラマがファンタジーであると定義しているが、それは現実の刑事を逸脱した服装や車でコロンボを登場させるだけではなく、犯罪捜査を超えた刑事と犯人との交流を可能にしている。単に犯罪の捜査を展開するだけのドラマではなく、刑事と犯人の心のふれあいを通してアメリカ競争社会の問題点を考えさせるところに、『刑事コロンボ』の倫理性とドラマとしての深みがある。

そのような魅力を十二分に見せてくれる作品を5つ選んで、次に紹介する。

① *Any Old Port in a Storm* (1973)

カリフォルニアワインを開発するカッシーニは、ワイナリー所有者の弟が金欲しさに所有権をライバル会社に売り渡すと聞いて、激昂して殺害する。カッシーニに疑惑を抱いて捜査するコロンボは、ワイン作りに情熱を注ぐ彼の姿に共感して親交を深める。第3シーズン2作目。

② *Mind Over Mayhem* (1974)

化学者の息子が盗用した論文で賞を受ける直前、それに気づいて受賞の辞退を迫る彼の指導教授を、父の人口頭脳研究所所長が殺害する。盲目的父性愛と良心の呵責の間で揺れる所長の心がよく演じられている。第3シーズン6作目。

③ *By Dawn's Early Light* (1974)

軍人養成という崇高な社会的使命を続けるため、陸軍幼年学校校長ラムフォード大佐は、生徒数の減少を理由に学校を共学の短大にしようとする理事長を祝砲の暴発を装って殺害する。大佐の心のジレンマを軍人らしい抑制された態度で好演したパトリック・マクグーハンは、この作品でエミー賞を受賞。第4シーズン3作目。

④ *Forgotten Lady* (1975)

元ミュージカルスターのグレース・ウィラーが、カムバックを夢みて必要な資金調達のため、夫を殺害して資産を奪う。彼女の病気を案じて夫が資金提供を拒んだことや記憶の障害で彼女が自分の犯行を覚えてないことを知り、コロンボは逮捕を断念する。老いの中で必死に過去の栄光を求めるグレースと彼女を支える演出家の演技が印象に残る。第5シーズン1作目。

⑤ *The Conspirators* (1978)

詩人のデブリンはアイルランド革命軍に密かに武器を密輸しているが、自分をだまそうとした武器商人を殺害して警察に追われる。いっしょにアイリッシュウィスキーを飲んで詩を吟じながら、密輸を敢行しようとするデブリンと捜査の網を次第に狭めるコロンボとの駆け引きが見もの。政治的スケールの大きな作品。第7シーズン5作目。

5. 『刑事コロンボ』と日本

『刑事コロンボ』は1970年代に土曜日の夜NHKで放映されて、日本でも大きな反響を呼んだ。今でも根強いファンがいるらしく、『推理と対決』というウェブサイトがあって、全45作のドラマそれぞれに関して詳しい解説を付けている¹²⁾。しかし、このウェブサイトに示された日本のファンの関心が、コロンボの犯罪捜査だけに終始して彼と犯人の人間的交流にまで言及しない点に、多少の違和感を覚える。その理由は二つ考えられるのではないかな。

第一に吹き替えの問題。吹き替えを担当した日本の俳優は、忘れっぽさや妻や親戚の話を持ち出して犯人につきまとうコロンボの奇妙な態度を、とぼけた口調でうまく表現している。しかしコロンボの「ボケ」を強調しすぎて、コロンボが犯人に接する時の二面性をうまく使い分けていない。実際のコロンボが話す英語はもっと"straight-forward"なので、彼が犯人を気遣ったり真剣に問い糺す時の真摯な態度がよくわかる。しかしこの吹き替えではその点がうまく伝わらないので、「コロンボと犯人の人間的交流」というこのドラマのもう一つのテーマが、日本の視聴者に理解されないのではないかな。

第二にアメリカの競争社会の理解度。アメリカ社会の競争原理は、個人主義と表裏一体である。多民族国家でコネやえこひいきによる差別を防ぐために、個人の能力を最大限に評価する「機会の平等」の原則が確立している。したがって、個々人を正当に扱うためにも、能力に応じて評価の差をつける能力主義が重要視される。しかし日本の社会は横並びの「結果の平等」の原則で安定を保ってきたので、個々人に細かく評価の差をつけると、逆に波風を立ててしまう危険がある。評価される側も、自分の能力を必要以上に見せつける人は、周りから白い目で見られる風潮がある。『刑事コロンボ』を日本人の視点からみると、みすばらしい刑事が競争社会の勝者を追い詰める痛快

さばかりが目に入ってしまうのではないか。しかし実際のコロンボは、裕福な犯人の罪は追求するが、彼のそれまでの業績を尊敬する意識は変わらない。そんなコロンボの二面性は、競争社会で勝つことを素直に称賛できるアメリカ人には理解しやすいが、日本人には理解しがたい問題なのかもしれない。

注

1) Richard Levinson & William Link, *Stay Tuned: An Inside Look at the Making of Prime-time Television* (New York: Ace Books, 1981). .

2) *Stay Tuned*に掲載されたプロデューサーの一日のスケジュール例 (p.78~p.90) を参照。

3) Mark Dawidziak, *The Columbo Phile: A Casebook A Complete and Illustrated History of Television's Finest Series* (New York: The Mysterious Press, 1988).

4) Peter Folk, *Just One More Thing: Stories from My Life* (New York: Carroll & Graf Publishers, 2006).

5) Richard Levinson & William Link, *Stay Tuned*, 98.

6) Mark Dawidziak, *The Columbo Phile*, 8.

7) Peter Folk, *Just One More Time*, 154.

8) Richard Levinson & William Link, *Stay Tuned*, 95.

9) 志村陽一『異文化社会アメリカ』研究社、2006年。

10) Mark Dawidziak, *The Columbo Phile*, 76.

11) 推理と対決『刑事コロンボ』研究ウェブサイト。

URL : <http://tanokura.web.infoseek.co.jp>